

---

# 仮面ライダーカブト TIME PARADOX

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーカブト      T I M E      P A R A D O X

### 【Nコード】

N 7 2 8 0 A

### 【作者名】

桂      ヒナギク

### 【あらすじ】

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石通称「シブヤ隕石」によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

## ++プロローグ++（前書き）

このお話は、ファンフィクションとして私が勝手に書いてるものです。同人誌に興味の無い方や、ファンフィクション否定派は読まない方が良いでしょう。

## ++プロローグ++

7年前、突如地球に飛来し、日本・渋谷に落下直撃した巨大隕石

通称「シブヤ隕石」 によって周囲地域は壊滅。隕石は人的にも多数の被害を与え、7年後の現在でも渋谷は復興されることも無く封鎖されている。だが、これらの災厄は終わった訳ではなく、すべての始まりにすぎなかった。

隕石落下直後より地球人類に擬態し街中を白昼堂々と活動、次々と人を殺しつつ繁殖する正体不明の宇宙生命体の人々に恐怖をもたらしていた。「ワーム」と呼ばれるその生物を滅ぼすため、人類は秘密組織「ZECT」を結成。しかしワームのもつ、目にも留まらぬ高速移動能力「クロックアップ」の前に、ZECTは敗北を重ねる。もはや最後の希望は、完成間もない武装システム「マスキドライダーシステム」のみであった。これを装備し、使いこなせる者が現れれば、ZECTはワームに対抗しうる力を手に入れられるのだ。

++プロローグ++（後書き）

えっと、別のストーリーでまたやっちゃいます。

## 第1話・選ばれし者（前書き）

第二回目、仮面ライダーカブト、「選ばれし者」をお楽しみ下さい。

## 第1話：選ばれし者

東京都渋谷区・・・。

此処に、一人の男が佇んでいた。

男の名は、加賀美<sup>かがみ</sup>新<sup>あらた</sup>。

彼は、ワームに対抗すべく、人類が結成した秘密組織「ZECT」の隊員である。

加賀美が佇んでいると、

「加賀美君。」

と、一人の女性が声を掛けた。

女性の名は、岬<sup>みさき</sup>結月<sup>ゆづき</sup>。

彼女もまた、彼と同様にZECTの隊員である。

そしてもう一人、この物語が進行する上で重要な人物が、高校生である主人公のこの俺、黒川 慎吾様だ。

「あ、岬さん。」

と、加賀美は言う。

「加賀美君、帰るわよ。」

「はい。」

二人は、壊滅した渋谷を離れると、帰路に着いた。

翌日、彼らは出勤をした。

「お前達、今日の仕事、分かってるな？」

と、田所が言う。

「上野公園に出没するワームを殲滅。」

と、岬が言う。

「その通りだ。じゃあ行くぞ。」

田所はそう言って、上野公園に向けて車を発進させた。

上野公園に到着すると、加賀美と岬はワーム殲滅に備えて準備をす

る。

一方、主人公の俺様は、上野公園でジョギングをしていた。すると、最近世間を脅かしている、ワームとか言う奴と戦ってる二人の人物を見かけた。

俺は暫くの間、そいつらの様子を見る事にした。

「しまった、もう弾が！」

加賀美は、弾を切らしてしまった。

「こっちもよ！」

岬も同様だった。

「俺、やってみます！」

「分かったわ。早く戻って来てちょうだい！」

「はい！」

加賀美は、そう返事をする、持ち場を離れて車に戻った。

「どうした加賀美！？」

田所が聞く。

「ベルト、取りに来たんです。」

「そうか。ならその箱を開ける。」

田所は、加賀美の横にある箱を開ける様指示した。

加賀美はその箱を開けると、

「これがベルト・・・。」

と、呟いた。

「何をしている？さっさと行け！」

田所は加賀美にそう言った。

加賀美は、車を出ると、急いで持ち場に戻った。

加賀美が戻って来ると、岬はワームに捕まっていた。

「岬さん！？」

加賀美が叫ぶと、ワームはそれに気付き、岬を放した。

「良くも岬さんを！」

加賀美はそう言って、ベルトを腰に装着し、

「来い！カブトゼクター！」



と、右手を挙げながら叫んだ。

すると、カブトムシの格好をした赤い何かが空から飛んで来て、加賀美の前までやって来た。

加賀美は、それを掴もうとしたが、赤いカブトムシに避けられて掴み損ねてしまった。

加賀美を避けたカブトムシは、方向を変えて俺の所へ飛んでくる。

俺はそれを掴み、

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言つて、

「変身。」

と、言いながらそいつを腰のベルトに装着し、それと同時にマスクドライダーに変身をした。

変身が完了すると、

「change！」

と、機械音が鳴る。

俺の存在に気付いたワームは、脱皮をしてサナギワームから成虫ワームへと進化を遂げた。

成虫へと進化したワームは、肉眼では捕らえられない超高速移動能力・クロックアップをし、俺に近付いて来た。

俺は、武器・カブトクナイガンを握ると、かろっじて見えるワームに、一発の弾を撃ち込んだ。

するとワームは、一発の銃弾を受け、後に跳ね返り、地面に叩き付けられた。

俺はその隙に、カブトクナイガンを連射した。

そして、連射攻撃を受けたワームはその場で爆発を起こして消滅した。

成虫ワームを倒した俺は、変身を解き、それと同時に腰のベルトに装着されていた真っ赤なカブトムシは、どこかへと飛び去って行った。

「何なんだお前？」

と、俺に聞く加賀美。

「選ばれし者だ。」

俺はそう言っで、去って行く。

「待って！」

と、岬 結月。

だが、俺は岬が止めるのを無視し、その場から立ち去った。

## 第2話：VS高校教師

東京都立高等学校。

俺はこの学校に普段は通っている。

この学校は、日本では進学校と呼ばれる程有名で、偏差値がもの凄く高い。

が、この世界で優秀でNo.1の俺にしてみればこんな所に入るのはチョロい訳で。

つてのはどうでも良くて、重要なのは、先日、この学校内で一人の女子生徒が何者かに殺害されたと言う事件だ。

キンコンカンコン

と、放課後の合図のチャイムを鳴らす。

すると、教室にいた生徒は、殆どが下校を始めた。原因は昨日の殺人事件だ。

残ったのは、俺を含めて四人。

一人は、霧島 真理しんりと言う篠原 愛美つぐみにそっくりな背の小さい可愛い女の子。

彼女は、俺がこの世で最も大切に思っている人間だ。

彼女に何かあれば、俺は直ぐに飛んでいくだろう。

二人目は、友人の狩屋 浩介。

彼は、昨日殺された被害者の彼氏だ。

三人目は、友人の榊原 真理まりえ絵。

彼女は、殺された被害者と仲が良かった。

そして最後の四人目。

名は、黒田 哲夫。

黒田は、生まれてからこの18年間、彼女を持った事が一度も無い上、オカルト系で気味悪がって女性が近寄らない、ことごとく女性に縁がない男だ。

まあ、これでも数少ない俺の友人（？）なんだが……。さて、紹介も終わった所だし、一仕事するでしょう……。

俺は鞆を持ち、扉の前まで行く。

すると、

「慎吾、待つて。」

と、真理が俺を止めた。

「何だ？」

「今日、一緒に帰ろう？」

「悪い。今日は駄目なんだ。」

「どうして？」

「やらなきゃいけない事があるんだ。」

ほら、昨日女子生徒が図書室で何者かに殺された。だから、俺はそれを調べに図書室へ寄る。」

俺は真理にそう言った。

「それならあたしも付き合うよ。」

真理はそう言った。

「邪魔すんなよ？」

俺はそう言つと、真理の同行を許可した。

俺達は、教室を出て図書室に行った。

図書室に着くと、数人の警察がまだ捜査をしていた。

「お、来たか。」

と、刑事が一言。

刑事の名は、高岡たかおか 賢まさる。

彼は警視庁捜査一課で働く敏腕刑事だ。

そして俺は、そんな彼を手助けする探偵だ。

「高岡刑事、捜査の方は何処まで進んでる？」

「それが、全く手懸かりが掴めて無いんだ……。」

「死因は？」

「司法解剖の結果では、心臓を潰された事によるショック死だそう  
だ。」

ショック死・・・。

「死亡推定時刻は何時だ？」

「昨日の午後6：30頃だよ。」

6：30・・・。

「大体分かった。中に入れてくれ。」

俺がそう言つと、高岡刑事はkeep outの黄色いテープを持ち上げる。

俺はそのテープを潜つて中に入る。

それに続き、

「待つて慎吾。」

と、真理も入ってくる。

俺は、被害者の遺体があつたと言つ本棚の前に移動した。

本棚の前に移動すると、警視庁捜査一課の高山警部が立っていた。

「来たか。」

「警部、何か見つかりましたか？」

俺はそう聞いたが、高岡かねしまが言つた通り何も見つからなかったらしい。因みに、被害者の名は、金島めくみ 恵。

「目撃者はいないんですか？」

「ああ、校内を回つて聞き込みをしたが、誰一人としていなかったよ。」

ただ、殺される直前に被害者と会つた人物がいるんだ。君の担任だよ。」

警部はそう言つた。

「どうも。」

俺はそう言つて、会釈をすると、警部と別れて職員室に向かった。職員室に着くと、

「失礼します。桃山先生、いますか？」

と、俺は聞いた。

すると、「何かしら？」

と、桃山が現れた。

「昨日の事について聞かして下さい。」

「昨日の事？それって、金島さんの事かしら？」

「ええ。」

「そうね。彼女と最後に会ったのは、殺される5分前かしら。5分前……。」

「詳しい時間帯は覚えていますか？」

「確か、6：25頃だったわ。」

「その時、怪しい人物とかは見ましたか？」

「いいえ、見てないわ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

俺はそう言って、桃山と別れた。

「ねえ、犯人解った？」

と、真理が聞いた。

それに対して俺は、

「ああ、解った。」

と、答えた。

「え、誰？教えて。」

と、真理。

「嫌だ。」

「ケチ。」

「どうせ俺はケチだ。」

そう言い、俺は図書室に戻った。

「黒川君、どうした？」

と、警部。

「担任の桃山についてなんですが、彼女に捜査状況を話しましたか？」

「いや、話してはいないぞ。」

「死亡推定時刻は？」

「それも話していない。」

「そうですか。」

俺は警部に礼を言うと、真理に桃山を屋上に連れてくる様頼んだ。

そして俺は、一人屋上に行き、桃山を待った。

それから暫くして、真理と桃山がやって来た。

「黒川君、こんな所に呼んで、何の用？」

「桃山先生。金島 恵さんを殺害したの、貴方ですね。」

「え！？な、何を冗談に？」

「先ほど、貴方はこう証言した。」

「――――――――――」

「そうね。彼女と最後に会ったのは、殺される5分前かしら。」

「詳しい時間帯は覚えてますか？」

「確か、6：25頃だったわ。」

「――――――――――」

「そ、それが一体何の証拠になるつてのよ！？」

「そうだよ慎吾。私にも解る様に説明して。」

俺は、推理した事を真理に解りやすく説明する。

「先ほど、刑事さんに桃山先生の事を聞きました。」

「――――――――――」

「担任の桃山についてなんですが、彼女に捜査状況を話しましたか？」

「？」

「いや、話してはいないぞ。」

「死亡推定時刻は？」

「それも話していない。」

「そうですか。」

「――――――――――」

「あ、そっか。」

と、真理は納得する。

「ちよつと何なのよ？貴方、あたしを疑つてるの！？」

「はい、疑ってます。それに、犯人と警察しか知らない事、知って

いるみたいですしね。」

俺が桃山にそう言つと、

「き、聞いたのよ。警察が喋っているのを。」  
と、言い返した。

「何を聞いたのですか？」

「死亡推定時刻よ。それで、最後に会ったのが、殺される5分前だ  
って解ったのよ。」

「それは何処で聞いたんですか？」

「図書室の前よ。」

「成る程。他には？」

「それだけよ。」

この時、俺は確信した。コイツが犯人だと！

「桃山先生、残念でしたね。」

「何がよ？」

「図書室の前で警察が話した事。全部聞いていたんですよ。」

「聞いてたわ。」

「だとすると、矛盾してるんですよ・・・貴方の言ってる事が。」

「矛盾って、何処が矛盾してるの？」

桃山は聞く。

コイツ、相当の馬鹿？

「貴方は先ほど、こう言った。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「死亡推定時刻よ。それで、最後に会ったのが、殺される5分前だ  
って解ったのよ。」

「それは何処で聞いたんですか？」

「図書室の前よ。」

「成る程。他には？」

「それだけよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その何処が矛盾してるって言うの？」

「警察は、死亡推定時刻を喋る前に司法解剖の結果を話しているん  
ですよ。」



貴方が警察の話を最初から全部聞いていたのなら、司法解剖の結果を知らないのは明らかにおかしい！

貴方の証言は矛盾しています！」

決まった。後は自供をして頂くのを待つだけだ。

桃山は、

「ふふ。やつぱり、嘘は吐けないのね。」

と、苦笑しながら言う。

「そうよ。彼女を殺したのよ。」

「動機は何です？」

俺は聞く。

「口封じよ。」

桃山はそう言った。

「口封じ？」

「あの子、見ちゃったのよ。」

私が桃山を殺し、擬態をした所を。だから殺したのよ。」

擬態・・・ワームか？

「お前、ワームだな。」

俺はそう言った。

「そこまで知ってるんだ。それじゃあ生かしてはおけないわね。」

そう言っつて、桃山は成虫ワームに姿を変えた。

それを見た真理は、

「キヤー！」

と、悲鳴をあげた。

「五月蠅い！」

ワームはそう言っつて、口から長い舌を出し、真理に襲い掛かった。

俺は、カブトゼクターを呼んだ。

ゼクターは、ワームの舌を切り落とし、俺の元へとやって来る。

俺はそれを掴み、

「変身。」

と、ゼクターをベルトに装着してマスクドライダーに変身をする。

変身が完了すると、

「change!」

と、機械音が鳴る。

俺は真理に、

「逃げる。」

と、言ったが、

「見てる・・・。」

と、真理は言った。

「怪我しても知らないぜ。」

俺は真理にそう言っつて、カブトクナイガンでワームを攻撃。

攻撃を受けたワームは、クロックアップをして、俺に近付く。

俺は直ぐに、

「キャストオフ。」

と、ゼクターホーンを反対側に倒した。

すると、

「cast off」

と、機械音を鳴らし、マスクドアーマーが吹っ飛び、ライダーフォ

ームになる。

ライダーフォームになると、

「change beetle」

と、機械音を鳴らした。

ライダーフォームになった俺は、

「クロックアップ。」

と、言っつてベルトの右にあるボタンを押し、

「clock up」

と、機械音を鳴らしてクロックアップをする。

その瞬間、全ての時間の流れが遅くなる。

俺はその中で、ワームに攻撃を仕掛ける。

ワームは攻撃を受けつつ反撃をするが、俺は巧くそれを避けながら攻撃をする。

ワームは俺の攻撃を受けて怯んだ。

こうなったらしめたもので、

「ワン、ツー、スリー」

と、俺はフルスロットルを順番に押していき、ゼクターホーンを倒し、

「ライダーキック。」

と言って、ゼクターホーンをもう一度倒す。

すると、右足が燃え上がり、

「ルアイダーキック」

の機械音と共に回し蹴りをワームにお見舞い。

ライダーキックを喰らったワームは、爆発を起こして消滅。

ワームを倒した俺は、

「clock over」

と言う機械音を鳴らしてクロックアップを解除する。

戦いの一部始終を見ていた真理は、

「え、今何が起こったの!？」

と、びつくりした様子で俺に言った。

俺は変身を解き、

「化け物を倒した。」

と、真理に言った。

「え、でも1秒も掛かってないよ?」

そりゃそうだ。

タキオン粒子を使って人間の目では知覚出来ないスピードで動いてたんだからな。

それから数分後、爆音を聞いた高岡刑事が駆けつけて、

「今何があった!？」

と、俺達に聞いた。

俺は当然、

「何でも無い。」

と、言って誤魔化した。

まあ、事実を言った所で、誰も信じてはくれないだろう。  
だから俺は敢えて誤魔化したのだ。

「そうか・・・なら良いんだが・・・。」

それより、こっちに桃山って言う君の担任が来たよね？」  
ぐはっ！

どう答えれば良いんだ？

取り敢えず、

「来てない。」

と、答えておけば問題無いだろう。

「そうか、見間違いか。」

と、高岡刑事は言った。

「それじゃあ黒川君。桃山を見かけたら教えてくれ。」

「どうして？」

「金島 恵を殺したのが桃山だからだ。」

高岡刑事はそう言つて、屋上を去って行った。

警察は捜査はもうそこまで進んでいるのか。

でも、この事件は一生解決出来ないだろうな。

と、俺は思ったのである・・・。

後日、校内のゴミ捨て場で桃山の遺体が見つかり、桃山は金島 恵  
を殺害してから自殺をしたと言う事で事件は片づいた。

ワームさん・・・隠すなら見つからない所に隠せよ。

## 第2話：VS高校教師（後書き）

ついやってしまった推理。

最初、書いてて、推理物なのか、ライダーものなのか解らなくなっていた。

まあでも、こういうのも面白くて良いか。

### 第3話：ZECT

とある廃墟ビルから、東京都立高等学校の屋上を双眼鏡で見ている男がいる。

「ふっ、アイツか。」

男はそう呟くと、携帯電話を取りだした。

『はい、加賀美。』

「カブトを見つけました。東京都立高等学校の生徒の中に紛れ込んでいました。」

『そうか。』

電話の相手は、そう言ったきり、黙ってしまった。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリリ

朝の目覚ましが鳴り、目を覚ます。

目を覚ました俺は、鳴っている目覚まし時計を止め、トイレを済ませ、洗面所で顔を洗い、歯を磨く。

そして、食事に向かう。

「おはよう。」

と、俺はお袋に朝の挨拶をすると、

「おはよう。」

と、お袋も挨拶をする。

「慎吾、今日はなんか予定あるの？」

と、お袋は聞く。

「真理と遊びに行く。」

「そう。じゃあお母さん、出かけちゃうから鍵持ってたね。」

「わーってるよ。」

俺はそう言つと、食事を済ませ、鍵を持って家を出る。

自宅を出た俺は、真理の家に真理を迎えに行く。

ピンポン

と、インターホーンを押す。  
すると、

「はい。」

と、真理が顔を出す。

「行こうぜ真理。」

俺は真理に言う。

真理は、

「ちょっと待ってて。」

と言つて、扉を閉めてしまった。

それから数分後、真理は再びドアを開けると、

「お待たせ。」

と言つて、制服姿で出て来た。

「遅えよ。」

俺はそう言う真理に言つてやったが、

「女の子はね、支度に時間が掛かるのよ。」

と、言い返されてしまった。

「それじゃ、行こつか。」

真理はそう言つた。

何処へ行くか？

それは、今流行のデートスポットだ。

そこは、縁結び公園と呼ばれており、そこでキスをした者は必ず結ばれると言つ噂のある公園だ。

俺達は今日、そこへ行こうと言つ事だ。

「また今日も現れるかな？」

と、真理。

俺は、

「何が？」

と、聞く。

すると真理は、

「昨日の化け物みたいなの。」

と、言った。

「バ一口、そんな演技でもねえ事言うな！」

「嫌だ。だって、慎吾が戦ってる所、見たいんだもん。」

「変わってるよ。お前……。」

俺達がそんな話を話していると、縁結び公園に到着した。

縁結び公園に到着した俺達は、辺りが騒がしい事に気が付いた。

俺達は、人集りに紛れ込み、奥まで行くと、ある光景を目の当たりにした。

遺体だ。体中、血だらけの女性の遺体だ。

「これって……。」

真理が呟く。

俺は、遺体に近付き、遺体を調べた。

遺体は既に、死後硬直が始まっており、体温も下がっていた。

「皆さん、これは殺人です。」

警察が来るまで待機していて下さい。」

俺がそう言うと、

「殺人ですって！」

とか、

「嫌だ、怖いわ。」

とか、

「冗談じゃねえぜ！」

とか、色々な声が聞こえた。

が、俺は気にせずに警察を呼んだ。

それから数分後、現場に警察が駆けつけて来た。

「黒川君、まさか君がこんな所にいるとわね。」

と、高山警部が来て言う。

あ、そう言えば……。

「高岡刑事は？」

「ああ、彼なら風邪で欠席だ。

で、死因は？」



「失血死ですよ。」

俺はそう言う。

警部は、確認の為に遺体を確認した。

「これは酷い！体中、血だらけじゃないか。」

と、言う。

その時だった。

「どいて下さい、ZECTの者です。」

と、手帳を見せながら、一人の女性と男性がやって来た。

岬 結月と加賀美 新だ。

「ご苦労様です。」

と、警部は敬礼をする。

ZECT・・・一体何者なんだ？

岬は、遺体を確認すると、

「体中血だらけじゃない！」

と、警部と同じ事を言う。

「岬さん。」

「何、加賀美君？」

「変ですよ、この遺体。」

加賀美はそう言う。

「確かにそうね・・・。」

と、岬。

高山警部は、

「何か不審な点でも？」

と、岬に聞いた。

岬は、

「傷口がおかしいんです。これは人の手では出来ない事です。」

と、言った。

「と言う事は、ワーム？」

と、加賀美。

流石プロ。

俺はこの二人に感心してしまった。

「加賀美君、ZECTカムを出して。」

「はい。」

加賀美は、そう返事をする、「ZECTカム」を取り出した。

ZECTカム・・・それは、ワームの熱反応をチエックする装置で、ワームには体温が無い為、これを使えば直ぐに見分けられる。

岬は、それを受け取ると、人集りの中をそれで確認した。

「いた！」

岬はそう叫んだ。

岬は、

「貴方、ワームね。」

と、俺に向かって言った。

「ちょ、ちょっと待て！俺がワームだと！？」

と、俺は聞き返す。

「ZECTカムが反応してるのよ。兎に角来なさい！」

と言って、岬は俺を引っ張る。

そして、俺は車に乗せられ、ZECT本部へ連れて行かれ、取調室へと入れられた。

「貴方、自分が何をして此処に連れて来られたか。当然知ってるわよね？」

さあ？

「貴方は縁結び公園で人間を殺したのよ。」

「ちょ、ちょっと待て！俺が人間を殺した？」

何言ってるんだよ！？訳分かんねえ！」

「とぼけたって無駄よ。このZECTカムはワームにしか反応しないんだから。」

岬はそう言う。

「だからさあ、俺が人殺しだとか、ワームだとか何訳の分からない事言ってるんだよ！？」

第一、俺は人間だ！」

と、俺はワームである事を否定するが、

「いいえ、貴方はワームよ。」

と、岬は言い切る。

「証拠はあんのかよ？」

俺はそう聞いた。

まあ、どうせ証拠は無いだろうけどな。

と、思いきや、

「あるわ。付いてきて。」

と、岬は言った。

岬は、俺を霊安室へと案内した。

「此处はZECTが押収した遺体を保管する霊安室。本物は此处に眠ってるわ。」

そう言つて、岬は霊安室のケースを順番に見て言った。

「黒川、黒川、黒川、黒川・・・あつた。」

岬はそう言つて、黒川 慎吾と書かれたケースを開けた。すると、そこには俺の遺体が入っていた。

「ど、どう言う事だ!？」

と、俺は岬に聞く。

「見ての通り、一週間前に貴方がこの子を殺して擬態したのよ。」

「俺が殺して擬態した・・・。そんなの記憶に無い。」

俺は岬にそう言つてやった。

「それじゃあこの薬を飲んで。」

と、岬は錠剤の入った瓶を出した。

岬は、その瓶から1錠だけだすと、俺にそれを渡した。

「もし貴方がワームでないのなら、それを飲んでも擬態が解けてワームになる事は無いわ。」

岬はそう言った。

「面白い。それでならなかったらどうしてくれる？」

俺は自信満々に満ちた岬にそう言った。

「罰として貴方の奴隷として生きて行つてあげるわよ。」

岬はそう言う。

俺は、その錠剤を飲んだ。

すると、俺の身体に変化が現れ、カブトムシがモチーフのワームに身体が変わってしまった。

「ど、どうなってんだ俺の身体？」

俺がそう言うと、顔をメットで隠し、スーツを着たアリがモチーフの格好をした小隊がやって来て囲まれてしまった。

「お前ら何なんだよ!？」

と、俺が言うと、その中の一人がメットを外し、

「我々はワームを倒す為に作られたZECTの攻撃部隊シャドウだ。お前を抹殺する。」

と、言った。

訳が分からなくなった俺は、取り敢えずそこから逃げ出した。が、シャドウの部隊は、俺を追って来る。

逃げ出してから暫くすると、薬の効果が切れ、人間の姿に戻った。

「待て！」

と、メットを外した男が言う。

俺は、メットを外した男の言う通りに待ってやった。

すると、メットを外した男は、右手を頭の上に伸ばした。

それと同時に、蜂がモチーフのゼクターが男の元へ飛んできた。

男は、

「変身。」

と言い、左手首のプレスにセットし、マスクドライダーに変身をした。

やれやれ、面倒な奴だ。

俺は、カブトゼクターを呼び、

「変身。」

と言い、ベルトに装着してカブトに変身した。

「カブト!？」

ライダーは驚いて言った。

俺はライダーに、

「ほお、俺を知ってるとはな。」

と、言った。

ライダーは、

「そのベルトはZECTが最近開発したもの。それを何処で手に入れた？」

と、聞いた。

それに対し俺は、

「このベルトとは長い付き合いだね。幼い頃に拾ったんだ。」  
と、言った。

「拾ったか何だか知らないが、お前を倒す！」

と、ライダーは言つて、俺に攻撃しようとした。

が、岬がやって来て、

「矢車さん待つて！」

と、止めた。

ライダーは、

「どうしたんですか？」

と、岬に聞いた。

「私に話をさせて。」

岬はライダーにそう言つと、俺の方を向いた。

「貴方、3日前に上野公園で私と会わなかったかしら？」

と、岬が聞いた。

俺は変身を解き、

「3日前？」

と、聞いた。

「そう。加賀美君がカブトゼクターを呼んで掴み損ねた日。  
あの時変身したの、貴方？」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言つて、

「変身。」

と、言いながらそいつを腰のベルトに装着し、それと同時にマスク  
ドライダーに変身をした。

- - - - -

そう言えば、そんな事があつた様な気がする・・・。

俺は頷き、

「会つたかも。」

と、言つた。

すると、

「御免なさい！助けて貰つたのにあんな事して、本当に御免なさい  
！」

と、岬は土下座をして謝つた。

「か、顔あげるよ。恥ずかしいだろ？」

岬は、

「そうね。」

と、顔をあげ、

「あなた達、もう良いわよ。」

と、シャドウに言つた。

するとシャドウは、渋々と帰つて行つた。

岬は、

「私、岬 みさき 結月 ゆづき。あの日からずっと貴方を捜していたわ。」

と、言つた。

「あんた、俺を捜してたのか。」

「つか、ワームと言ひ、ZECTと言ひ、あんたら何者なんだ？」

俺がそう聞くと、岬は、7年前のシブヤ隕石の事、人々を殺し、擬  
態をして人間社会に浸透しているワームの事を話した。

「ほお、それで俺にZECTに入れと？」

「ええ。貴方が入ってくれば心強いだよ。仕事上。」

「断る。あんな事された上に悪者扱い。そんな奴らがいる所になんか行きたくは無いね。」

俺はそう言つて断つた。

「まあ、何かあつたら此処に電話しな。」

そう言つて、俺の名刺を渡した。

「黒川 慎吾・・・探偵？貴方、探偵なの！？」

「何か問題でも？」

「いいえ、無いわ。」

何かあつたら電話するわ。じゃあね。」

そう言つて、岬は去つて行つた。

はあ、今日は色んな意味で疲れた。

早く家に帰つて寝よう。

そう思い、俺は帰路に着いた。

### 第3話：ZECT（後書き）

カブト、戦わなかったね。

次回は戦わせたいと思います。



#### 第4話：依頼（前書き）

主人公の慎吾、今回は天道並みの傲岸不遜振りを見せています。

#### 第4話：依頼

キンコンカーンコン

と、放課後を伝える合図が鳴り、教室から生徒は一斉にいなくなる。これも皆、世間を騒がせてるワームとか言う奴のせいだ。残ったのは俺一人だけ。

俺は、一人教室で考え事をしていた。

すると、教室に先生が来て、

「黒川、早く帰れ。最近、化け物が彷徨<sup>うろつ</sup>き始めて危ないんだから。」と、言ったので、

「心配して言ってくれるのは嬉しいが、俺は平気だ。」と、先生に言い返した。

「何を呑気な事言ってるんだ。化け物に襲われたら死んじゃうんだぞ。」

「ふっ、俺はその化け物に何度も襲われているが、こうしてちゃんと生きている。」

と言うか、もし現れたら俺がそいつを容赦無く殺す。」

「それは相当弱い化け物だったんだなあ。」

と、先生は挑発気味に言う。

その時だった。

俺の携帯が呼び出しをする。

俺は携帯を出すと、通話ボタンを押して、

「はい、黒川。」

と、応答する。

相手は岬だ。

「あ、岬さん。今日はどんなご用で？」

岬は、銀座でワームが暴れてると言った。

「断る。そのぐらい自分で解決しろ。」

俺はそう言って、強引にも電話を切った。

何で断ったか？

それは、岬に自分でもやれば出来ると教えてやりたいからだ。  
俺は先生に、

「さよなら。」

と言つて、教室を出る。

教室を出た俺は、下駄箱に向かい、靴を履いて外へ出る。

外へ出た俺は、校門に向かい、校門を通過する。

校門を通過した俺は、東京駅に行き、電車に乗って銀座に行った。

銀座に着いた俺は、真っ先に岬を搜した。

すると、岬が成虫ワームと戦っている所を発見。

岬は、ワームに向かって小型の銃を撃っていた。

小型と言つても、それなりの威力はある。人が喰らったら一溜まりもない。

傲岸不遜な俺は、そんな岬をずっと見ていた。

「私だつて、やれば出来るのよ！」

と、岬はワームに向かって銃を連射。

そして、遂にワームは爆発をして消滅。

「やった！ワームを一人で倒したわ！」

岬は喜んでいた。

俺は側まで行き、

「ワームは？」

と、とぼける。

「遅いわよ黒川君。ワームはあたし一人で倒しちゃったわ。」

と、喜びながら言った。

が、実際は俺がカブトに変身し、クロックアップをし、ワームにライダーキックをお見舞いして粉碎しただけなのだ。

やれやれ・・・全く、面白い奴だ。

「何だ、もう倒しちゃったのか。」

俺はそう言つて、岬と別れた。

岬と別れた俺は、銀座駅に向かい、電車に乗って、東京駅で降りて

自宅に向かう。

自宅に向かつて歩いている途中、俺は一匹の成虫ワームに襲われた。  
「やれやれ。」

俺はそう言っていると、カブトゼクターを呼び、

「変身。」

と言って、ゼクターをベルトに装着し、カブトに変身をした。

カブトに変身した俺は、直ぐにキャストオフをし、クロックアップをした。

クロックアップをした俺は、ワームにラッシュを掛けて怯ませ、ライダーキックを放ってワームを粉碎。

ワームを倒した俺は、クロックアップを解除し、変身を解くと、家路に着いた。

## 第5話：天道現る

ビストロ・ラ・サル。

俺は此処でアルバイトをして収入を得ている。  
お、客人だ。

俺は、お客の前に行き、

「ご注文は何に致しますか？」

と、使いたくもない敬語を使って聞く。

客は、

「いつものだ。」

と、答えた。

「あの、いつものとは何でしょう？」

「お前、新入りか？」

「ええ、まあ。」

と、俺は答える。

すると客は、立ち上がって厨房へ入って行く。

「待てよあんた。関係者以外立ち入り禁止だぞ。」

俺が客に言つと、

「放っておけ。」

と、ボクっ娘の目下部 ひよりが言つた。

「何故だ？」

俺が聞くと、ひよりは、

「あいつは、偶に此処で料理を作るんだ。」

と、言つた。

「成る程、料理人か。」

納得した俺は、厨房に入つて様子を見た。

「どうした？」

と、客は聞く。

「あ、いや、何を作ってるのかなって。」

俺はそう言った。

「サバの味噌煮だ。美味しいぞ。食べるか？」  
客はそう言った。

「俺はお袋以外が作った飯を食って美味しいと言った事は無い。俺に美味しいと言わせる事がお前に出来るか？」

と、俺は無理難題を押しつける。

が、俺は客の作ったサバの味噌煮を食って後悔をした。

「美味しい。」

俺がそう言つと、

「ふっ。」

と、笑った。

その後、客はサバの味噌煮をたいらげ、サルを出て行った。

俺は今の客の事をひよりに聞いた。

ひよりは、

「天道 総司。傲岸不遜な態度を取る男だ。」

と、言った。

明くる日、俺は学校に向かって歩いていった。

すると、成虫ワームが小さな女の子を襲おうとしてるのを発見。

俺は、

「待て。」

と、言った。

ワームは、俺の声に反応すると、俺の方を向いた。

「お前の相手は俺だ。」

そう言つて、カブトゼクターを呼ぼうとした時。

どこからともなく、

「お婆ちゃんが言っていた。

子供は宝物。

この世で最も罪深いのは、その宝物を傷付ける者だ。」

と言う天道の声が聞こえた。

天道は、ワームの前に来ると、俺の存在に気づき、

「お前か。助けてやるから逃げる。」  
と、言った。

人間が生身どうするつもりだ。  
そう思っただけで見てると、天道の元にヘラクレスオオカブトをモチーフにした赤いゼクターが飛んできた。

天道はそれを掴むと、

「変身。」

と言って、ベルトにゼクターを装着し、マスクドライダーへと変身した。

「成る程。だが、俺に助けはいらない。」

そう言って、俺はゼクターを呼ぶと、それをベルトに装着してカブトに変身をした。

カブトに変身した俺は、キャストオフをし、クロックアップをした。そして、ワームにラッシュを喰らわせ、怯んだ隙にライダーキックを放ち、ワームを粉砕。

それと同時に俺はクロックアップが解除され、変身を解いた。

天道も同じく変身を解くと、俺に声を掛けた。

「お前、資格者だったのか。」

と、天道。

「悪いか？」

「悪くは無い。だが、あまり人前で変身をしたりするな。ZECTに入っていない者は狙われるぞ？」

「そう言う天道はどうなんだ？」

「入っていない。」

所で、何故俺の名を知っている？」

「ひよりから聞いた。」

「そうか。」

天道はそう言うと、何処かへ去って行った。  
そして、俺はそのまま学校へと向かった。

第5話：天道現る（後書き）

今思つてみると、慎吾も天道も傲岸不遜だな。



## 第6話：学園祭でワーム

俺こと黒川 慎吾は、真理と一緒に真理の中学の時の友達の高校の学園祭に来ていた。

校内には、各クラス毎に出し物をやっている。

中には、俺の好きな推理物もあった。

「慎吾。」

真理が俺を呼ぶ。

「何だ？」

「3Aのクラスに行ってみない？あたしの友達がやってるんだ。」

「どんな出し物をやってるんだ？」

俺は真理に聞く。

「マジックだよ。」

「ほお、それは楽しそうだ。」

と言う訳で、俺達は3Aのクラスへ行くことにした。

3Aのクラスへ入ると、

「いらっしやいませ。」

と、生徒がお辞儀をする。

真理は、お友達を搜した。

「あ、いたいた。おい。」

真理は、お友達を呼ぶ。

お友達は、真理に気付くと、俺達の元へ寄ってきた。

「やあ、真理。久しぶり。元気だったあ？」

「うん、元気だよ。あ、紹介するね。」

彼女は、遠藤 美佐。私の中学の頃の親友なんだ。」

遠藤は、飯田 里穂に似ていて割と可愛かった。

「初めまして、遠藤 美佐です。宜しく願いします。」

と、遠藤は自己紹介をしながらお辞儀をした。

「黒川 慎吾だ。」

「あの、ひよつとして、黒川さんて俺様系？」  
唐突な質問だ。

しかも一発で当てやがった。

「美佐、駄目よそんな事言っちゃ。」

と、真理。

「良いよ、気にしてねえから。」

と、俺は言う。

「黒川さんて、優しいんですね。ハッキリ言って、私のタイプだねえ、今度、私とお食事しない？」

あの、それはお誘いですか？

「ちよつと美佐？」

「何、冗談よ。じょ・う・だ・ん。」

いや、マジに聞こえるぞ？

「それより美佐、マジック見せてよ。」

「OK！」

そう言うのと、美佐はトランプを出し、シャッフルをすると、ファンをした。

「黒川さん、一枚引いて下さい。」

俺は言われた通りに一枚引いた。

「それでは、それを誰にも見せずに自分だけ見て下さい。」

俺は、誰にも見せず、自分だけそれを見た。

ハートの3だった。

「それじゃあ、それを戻して下さい。」

俺はそれを見えない様にそれを戻した。

「それでは、シャッフルをして下さい。」

俺はトランプを受け取ると、シャッフルをしてから美佐に返した。

「では、このトランプから一枚だけカードを抜き取ります。」

美佐はそう言つて、トランプを横にすると、一枚だけを抜き出した。

美佐はそれを見て、

「貴方が引いたカードは、ハートの3ですね？」

と言って、俺の方へ回転させた。

「すげえ！」

俺は驚くと、真っ先に全てのトランプを調べた。  
が、怪しい所は特に見あたらなかった・・・。

いや、待てよ。このトランプ、形が少し変だ。

そうか、解ったぞ！テーパー加工をしてあるんだ。

俺は仕掛けが解ると、

「ぬるいな。」

と、言っただけだ。

「え？」

と、美佐。

「ふっ、こんな子供騙し、誰も引つ掛かるまい。俺がもっと凄いの  
を見せてやる。」

そう言っただけ、俺はバツと空の手からトランプを出現させ、トランプ  
を箱から出した。

「美佐さん、シャッフルして、一枚好きなカード選んで下さい。」

そう言っただけ、美佐にトランプを渡す。

美佐は、カードをシャッフルすると、一枚だけ引いた。

「それでは、それを覚えて下さい。」

美佐はそのカードを覚えた。

因みに、覚えたのはクラブの5だ。

「良いですか？今からカードをパラパラと落とすので、好きなところ  
でストップを掛けて下さい。」

俺は、そう言っただけ、右手でトランプをパラパラと左手に落として行  
った。

「ストップ！」

美佐は、真ん中辺りまで来ると、そう言っただけ。

「はい。では、こちらの上にそれを置いて下さい。」

そう言っただけ、左手を美佐に突き出す。

美佐はトランプをそこに置いた。

「はい。では、残りのカードを上に乗せて、間に入れてしまいます。」

「そう言つて、俺は残りのカードを重ねた。」

「と、見せかけてカバールパスを行った。」

「真ん中に入つてますね？」

俺は美佐に確認する。

美佐は、

「入つてる！」

と、言つた。

「では、今から指を鳴らすと、選んだカードが上に上がつて来ます。」

「そう言つて、俺は指をスナップさせ、一番上のカードを二枚同時にずらさない様にめくつた。」

すると美佐は、

「嘘！？どうやったの！？」

と、驚いた。

「では、もう一度やります。」

と、言つて二枚同時にひっくり返し、上の一枚だけを間に入れて、指をスナップをし、一番上のクラブの5をめくる。

「凄い……。どうやったの？」

美佐は俺に聞く。

「それは、教えられないです。」

と、俺は美佐に言つた。

「そないな事言わんと、ウチに教えてえな。」

と、美佐。

「2,000円でどうだ？」

「高！」

「1,500円。」

「もっと安く。」

「1,000円。これ以下は無理だぞ。」

「じゃあ良い。」

美佐は諦めた。

「じゃあ、またね。」

と、真理は言い、俺達は美佐と別れた。

美佐と別れ、廊下に出た俺達は、隣のクラス3Bがやってるお化け屋敷に入った。

のは良いが、全然怖くなく、つまらなかった。

3Bから廊下に出た俺達は、次に推理劇を見に行く為に体育館へと向かった。

体育館に着くと、俺達は開いている席に座って始まるのをまつた。

それから程なくして、推理劇が始まった。

俺達は、それをワクワクしながら見ていた。

そして50分、漸く劇も終盤に入り、やがて事件が解決し、推理劇が終了した。

「面白かったね。」

と、真理。

「そうか？俺的には面白くは無かったぞ。

推理にも若干矛盾があったしな。」

「ふうん。」

「な、何だよそれ。」

「別に。」

と、真理。

「さ、そろそろ帰ろっか？」

真理はそう言った。

「そうだな。」

こうして俺達は、帰ることになった。

俺達は、校門の前まで来た。

すると、

「ちよつと待って。」

と、美佐がやって来た。

「どうしたの美佐？」

真理は聞く。

「ちよつとこつち来て。」

と、真理を引っ張って行く。

「待てよ。」

と、俺は言ったが、

「女同士の話。直ぐ戻るから待ってて。」

と、美佐は言う。

美佐は、真理を人気の無い路地へ連れて行った。

「で、話って何？」

真理は美佐に聞く。

「ねえ真理、凄い力・・・手に入れて見ない？」

「凄い力？」

真理は疑問に思っただけ。

すると美佐は、

「おいで。」

と言った。

すると、緑色のサナギワームが美佐の横に降り立つ。

「な、何なの？」

と、真理。

「真理、あたしの仲間が、真理に擬態したいって。」

と、美佐が真理に言う。

「擬態？」

「そう。貴方は一度死んで、ワームの中で生きる。

生まれ変わるのよ。」

美佐はそう言った。

が、一部始終を見ていた俺は、

「待て。俺を差し置いて、そんな話、勝手にしてんじゃねえよ。」

と、美佐に言う。

「何なのよ貴方？」

真理が生まれ変わるの、邪魔する気？」

と、美佐。

「生まれ変わり？何がだ？」

お前らワームは自分勝手に人を殺し、擬態をして人間社会に浸透してるだけじゃねえか。

そんな事、人間は誰も望んじやいねえよ。」

と、俺は美佐に言う。

「そうとは限らないわよ？」

「え？」

「美佐はね、自分からワームの中で生きる事を望んだのよ。」

そんな人たちの心を、貴方は踏みじじる訳？」

と、美佐は言って、

「良いわ。貴方を先にワームにしてあげましょう。」

と、付け足し、もう一匹のサナギワームを美佐は呼んだ。

サナギワームは俺に擬態をし、美佐は成虫ワームへと姿を変える。

成虫ワームに姿を変えた美佐は、口から長い舌を出して俺を攻撃して来た。

が、俺はカブトゼクターを呼び、その攻撃をゼクターで防御した。

「お前らいい加減しろよ。」

そう言って、俺は飛んでいるゼクターを掴み、

「変身。」

と言って、ベルトに装着し、カブト・マスクドフォームに変身をする。

変身を遂げた俺は、俺に擬態しているワームをカブトクナイガンで撃ち殺して消滅させ、もう一匹のサナギワームもカブトクナイガンで撃ち殺して消滅させた。

すると、成虫ワームは俺を攻撃して来た。

俺は攻撃を受け後に退く。

が、反撃はしなかった。

俺がジッとしていると、ワームはもう一度攻撃して来る。

今度は、俺はその場に倒れたが、だるまの様に起きあがったが、反撃はしない。

そんな俺を見ていた真理は、

「どうして戦わないの!？」

と、俺に聞く。

「戦えねえよ!お前の同意が無きや。」

「どういう事？」

「真理、これはお前の戦いだ。

お前自身が、美佐をワームから救いたいと思わなければ、意味が無いんだ。」

俺は真理に言ってやったが、

「でも……。」

と、真理は躊躇った。

そこで俺は、

「親父が言っていた。

人は人を愛すると弱くなる……けど、恥ずかしがる事はない。それは本当の弱さじゃないから。」

と、真理に言ってやった。

真理は一息吐くと、

「お願い慎吾!」

と、言った。

「良いのか？」

「構わない。」

俺は、真理の気持ちを素直に受け取ると、成虫ワームに反撃をする。反撃を受けたワームは、クロックアップをして俺に接近。

「キャストオフ。」

俺はそう言って、ゼクターホーンを倒し、

「cast off」

と、機械音を鳴らしながらアーマーを弾き飛ばした。

弾け飛んだアーマーは、近付いてくるワームに当たって怯ませた。



俺がライダーフォームになると、

「change beetle」

と、キャストオフ完了の機械音が鳴った。

「クロックアップ。」

そう言つて、俺はベルトの右のボタンを押し、

「clock up」

と、機械音を鳴らしてクロックアップをする。

それに対し、ワームもクロックアップをする。

俺は、ワームに近付き攻撃。

攻撃を受けたワームは反撃をするが、俺は巧くそれを避けて攻撃し、怯んだ所でラッシュを掛ける。

ラッシュを受けたワームは、身動きが取れなくなる。

その後、俺はワームを軽く蹴り飛ばし、

「ワン、ツー、スリー」

と、フルスロットルを順番に押して行き、ゼクターホーンを倒し、

「ライダーキック。」

と言つて、もう一度ゼクターホーンを倒す。

そして、

「ルアイダーキック」

の機械音と共に、ワームに回し蹴りを叩き込む。

その瞬間、ワームは爆発を起こし消滅。

「clock over」

と、機械音が鳴り、クロックアップが解除される。

俺がワームを倒すと、

「ありがとう。」

と、真理が泣きながらライダーフォームの俺に抱きつく。

俺は変身解き、

「真理・・・強くなつたな。」

と言つて、真理を抱きしめた。

## 第6話・学園祭でワーム（後書き）

読者の方々は、旧友がワームだったかどうか？  
今回の真理みたいになりますか？

## 第7話：罪人狙い

真夜中。東京のとある細道。辺りには何も無い。

「へっ！チヨ口いもんだぜ！」

と、大きな袋を背負って走っている男がいた。

男が、何も無い細道を走っていると、目の前に何者かが現れた。

男は驚いた。自分と同じ姿をした人物が目の前にいたからだ。

目の前の男は、笑いながら、成虫ワームへと姿を変える。

「た、助けて〜！」

と、男は叫びながら逃げ出す。

が、ワームは男の前に先回りをし、口から毒液を吐いた。

毒液が掛かった男は、苦しみながらその場に倒れ、亡くなってしまった。

それから暫くして、これと似た様な事件が相次いで多発した。

警察の捜査で分かった事は、被害者には共通点があり、その共通点と言うのが全て、窃盗、恐喝、殺人と、必ず悪い事をしていると言う事だ。

俺は、この事件に興味を持ち、一人で捜査を始めた。

が、全く持って進展が無い。

こうなったら、捜査方法をおとりそうち囷捜査に切り替えるか。

そう思った俺は、ZECT本部に行き、岬に会った。

「あら。何か用？」

「岬さん。大至急頼まれて欲しい事がある。」

「何かしら？」

「最近、罪人が殺されると言う事件が相次いで多発している……。俺は、その事件を調べているんだが、ワームが関与しているんじゃないかと思う。」

「それで？この私に何をしろと？」

「囷だ。」

「囹？」

「ああ。」

俺はそう言っ、岬に囹捜査の協力を要請した。

岬は、

「良いわよ。」

と、やりたそうに言っ、

「そうか。なら今夜決行だ。」

俺はそう言っ、

「東京駅の前にある宝石店で強盗をして来てくれ。勿論、店員には事前に連絡が行っ、」

と、付け足した。

「え？でもそれじゃあ、掛からないんじゃない？」

「ニユースに取り上げる。そうすれば絶対来る筈だ。」

こうして、俺と岬は今夜、罠を張ることにした。

夜中……。

岬が宝石店の前に金属バットを持ってやって来た。

俺は無線を使い、

「慎重に行け。」

と、岬に言っ、

岬は、

「了解。」

とだけ言っ、店内に侵入した。

店内に侵入した岬は、宝石の置いてあるガラスケースを片っ端から破壊していく。

すると、警報ブザーが鳴り、セキュリティシステムが作動し、岬の行動を監視カメラが捕らえ、それをセキュリティ会社に映像として送る。

その間、岬はありったけの宝石を袋に詰めて行く。

そして、全て詰め終わると、岬は宝石店から逃げ出した。

それから暫くして、通報を受けた警察共が宝石店に駆けつけて来たが、時既に遅く、岬はもうそこにはいなかった。

その後、岬が行った事はニュースになり、瞬く間に世間に広がった。翌朝、俺は岬に会いに行った。

「岬さん、あれから変わった事は？」

「いいえ。無いわ。」

「そうですか。」

と、そこへ加賀美が出勤して来た。

「お客さん？」

と、加賀美。

「黒川だ。」

俺がそう言つと、

「何、この天道みたいな奴。」

と、岬の耳元で小さい声で聞く。

「聞こえてるぞ。」

加賀美は驚き、

「地獄耳。」

と、小さく聞こえない様に言った。

「地獄耳で悪かったな。」

加賀美は更に驚いた。

「駄目よ。彼を怒らしたら。」

と、岬が加賀美に言う。

「そ、そんなにやばいんですかコイツ。」

「コイツじゃない。俺様だ。」

「何なんだよ……。」

と、加賀美は呟いた。

が、加賀美は無視され、俺と岬の話が続く。

「じゃ、そろそろ出歩いてみるか……。」

岬さん、車降りてその辺をぐるっと一週して来てくれ。」

「分かったわ。」

岬はそう言つと、車を降りて歩いて行つた。

「なあ。お前、何がしたいんだ？」

と、加賀美が聞く。

「Need not know. (知る必要の無い事だ。)」

そう言つて、俺は答えなかった。

「英語だよなそれ。どういう意味なんだ？」

と、加賀美。

「知る必要の無い事だ。」

「そんな事言わずに教えてくれよ。」

コイツ・・・バカ？

説明してやるか？

「Need not know .

日本語で、知る必要の無い事つて意味だ。」

「違う。意味なんか聞いていない。」

岬さんとお前は何がしたいのか。それを聞いてるんだ。」

ぐはっ！これでは、俺がバカみてえじゃねえか。

「お前には教えない。」

俺はそう言つて断つた。

「教える。」

「嫌だ。」

「教える。」

「なら俺に敬意を払え。」

「何でそうなるんだよ？つーかお前、目上の人に対しての言葉の使い方、少し弁えた方が良い。」

と、加賀美は傲岸不遜の俺に注意するが、

「俺は世界一だ。」

と、言い返してやった。

するとその時、

「コンコン」

と、誰かが車の窓ガラスを叩いた。

俺と加賀美が確認すると、カブトゼクターが羽を飛ばたかせて飛んでいた。

「カブトゼクター!?!」

と、加賀美。

「遂に俺を選んだか!」

加賀美は勘違いをしつつ喜んでいた。

「来た様だな。」

俺はそう呟くと、車を降りて岬の所へ行った。

俺が行くと岬は、成虫ワームに胸ぐらを掴まれていた。

「待て。お前の相手は俺だ。」

俺はワームにそう言った。

すると、ワームは俺に気付き、岬の胸倉を放した。

俺は、カブトゼクターを掴み、

「変身。」

と言って、ベルトにセットしてカブト・マスクドフォームに変身した。

「キャストオフ。」

そう言つて俺はゼクターホーンを反対に倒してキャストオフをし、

「cast off...change beetle」

と言う機械音を鳴らしてライダーフォームになった。

ライダーフォームになった俺は、クロックアップをし、ワームに近付き攻撃。

攻撃を受けたワームは反撃をして来たが、俺はそれを巧く避けてラッシュを掛け、怯んだ隙にライダーキックをお見舞い。

ライダーキックを受けたワームは、爆発をして消滅する。

その後、

「clock over」

と、俺はクロックアップが解除されると変身を解き、

「岬さん。お怪我は?」

と、聞いた。

岬は、

「大丈夫。」

と言って車に戻った。

岬と別れた俺は家路に着いた。



第7話：罪人狙い（後書き）

こんなワームがいてくれたら世の中は平和なのに・・・いや、逆に危ないか（苦笑）

## 第8話：クッシー（前書き）

今回は北海道釧路市にある屈斜路湖が舞台なんです。

## 第8話：クッシー

夏休み……。

俺は真理と北海道に旅行へ来ていた。

当初は、俺一人で行くつもりだったが、真理がどうしても行きたいと言うので連れていく事にした。

そして俺達は今、釧路にいる……。真理が屈斜路湖のクッシーが見たいと言ったからである。

俺は、

「そんなの作り話だつて。」

と、真理に言つたが、

「いや、絶対いる！」

と、真理は言い切る。

「じゃあこうしよう。」

俺はいない方に掛ける。もしいなかったら蟹をおごれ。」

「良いわよ。その代わり、もしいたら貴方がおごるのよ。」

と言う訳で、俺達は蟹を掛けてクッシーの存在を確認する事になった。

俺は当然、クッシーなんて存在しないと思っていた。あの時までは……。

え？クッシーって何だと？

良いだろう。説明してやる。

クッシーとは、北海道釧路市の釧路湖の伝説に出てくる怪獣の事だ。

日本では、イッシーと並んで湖に棲む水棲獣として有名だ。

同湖には、昔から何か巨大な生物がいると伝えられている。

アイヌの伝説にも、月一回恋人同士を離れ島まで運んでくれる巨大なヘビの伝説がある。

地元では「クッシーを守る会」と言う地元の有志が集まって結成された会もあると言う。

1974年9月から1ヶ月間、北海道放送は湖面にテレビカメラをセットし、ダイバーも潜らせ大掛かりな調査をした。その結果、200ミリの望遠レンズが丸い物体を捉えた。

また、主な目撃例がある。

1972年、雑貨商の小浜氏が、国道を車で走っている時に、ボートを逆さまにしたような物体が湖を移動しているのを目撃。

1973年、遠足にやって来た北中学の学生約40人が湖面を移動する巨大な物体を目撃

1974年、雑貨商の小浜氏が、湖面を猛スピードで移動している巨大な物体をカメラで撮影

同年7月、地元の農業を営む和田さん一家が、湖面に約4m間隔で黒いコブを発見。

そのコブは、和琴半島付近に急に移動し、大きな水音をたてて水中に消えた。

同年9月、地元レストランの支配人片岡氏と、店のお客さんが100m先の湖面に、黒っぽい三角形のコブを2つ目撃。

そのコブの全長は、10～15mくらいで、モーターボートくらいのスピードで右から左に湖面を移動。

その様子を湖畔に居あわせた15人ほども目撃していた。同じく、地元の北海道放送が一ヶ月間クッシー探査を行った。

湖岸にTVカメラを設置し、湖にはダイバーも潜らせ探索を実施。その結果、湖面に浮かぶ丸い物体のような物を捉えた。

また、魚群探知機には水深20m付近に体長15mの謎の物体をキヤッチした。

1975年、地元の林業をしている宮原氏は湖畔で馬を使って木の切りだし作業を行っていた。

すると、作業をしている馬が急に暴れだし、宮原氏は湖面の方に茶褐色の物体があるのを発見した。

その物体は馬の頭よりも大きく、アニメのおばQのような形をしていて、目のような物がついていた、その目は銀色をしていたそうだ。

その内、その物体は水中へと消えて言ったという。

1976年5月26日、観光バスの運転手が湖面に巨大な生物を目撃。

1977年8月20日、観光バスの運転手とそのバスに乗っていた乗客22人がクッシーらしき生物を目撃。

1979年、札幌市の会社員一家が湖面を移動するクッシーらしき物体をカメラで撮影。

なんと、こんなにもあるではないか。

因みに、クッシーの名は、イギリスのネス湖のネッシーにちなんで名付けられたと言われている。

「慎吾、此处に貸しボートがあるよ。」

と、真理が言う。

「これ借りて探そうよ。」

そう言つて、真理は貸しボート屋に向かった。

「早く早く。」

全く、人騒がせな奴だ・・・。

俺は、貸しボート屋から手漕ぎボートを一艘<sup>いっそう</sup>1,200円で借りた。

俺は真理とボートに乗り込むと、ボートを漕ぎ始める。

それから暫くして、湖の中間地点までやって来た。

「噂によると、この辺の様だぞ。」

俺は真理にそう言つた。

「私、絶対に見るからね。」

と、真理は言う。

それから待つこと5時間。

それらしき物体は一向に姿を現さない。

「出て来ねえじゃねえかよ。罰として蟹、おごりな。」

と、俺が言つたその時だった。

水中から体調15m以上もある謎の物体が浮上して来た。

ボートは浮上して来た物体の影響で粉々になってしまった。

「た、助けて。溺れちゃう!」

と、真理・・・。

俺は、溺れ掛けている真理を助けながらも、その物体を確認した。その物体は、フタバスズキリュウの様な格好をしていて首がもの凄く長かった。

「これが、クツシー・・・。」

と、俺は呟いた。

「ね、本当にいたでしょ！」

と、嬉しそうな真理。

「俺の負けだ。約束通り蟹をおごつてやる。」

と、俺が真理に言つと、クツシーがいきなり襲いかかって来た。

クツシーは、口を開けると、俺達を一飲み。

飲み込まれた俺達は、クツシーの食堂を通つて胃袋まで辿り着いた。

「私達、どうなるのかな？」

と、真理が心配な表情で言う。

「さあな。兎に角、此处から出る方法を探さないと。」

俺はそう言った。

とは言つたものの、体内から抜け出す事など、死んで排出物になるか、吐いて貰うかしないと不可能だ。

俺がそんな事を考えてると、カブトゼクターがジョウントをしてやって来た。

成る程、そう言う事か。

俺はゼクターを掴み、それをベルトにセットしてカブト・マスクドフォームに変身をした。

「どうするの？」

と、真理。

「こうするのさ！」

俺はそう言つて、真理を抱きかかえると、勢いを付けてジャンプをした。

ジャンプをした俺は、胃から食堂へ入り、更に上昇をしてクツシーの口元まで行った。

クツシーの口まで来ると、俺はカブトクナイガンでクツシーの歯を切り裂き、クツシーの口から外の世界へ飛び出した。

そして、空中でキャストオフをしてライダーフォームになり、落下して行く。

俺は落下しながらライダーキックを発動させ、クツシーの目の前まで来ると、クツシーに回し蹴りをお見舞いしてやった。

ライダーキックを受けたクツシーは、大爆発を起こして消滅。

爆風を受けた俺達は、屈斜路湖の貸しボート屋まで吹き飛ばされた。吹き飛ばされた俺は、巧く体制を立て直すと、地面に着地をして変身を解いた。

「クツシー。いなくなっちゃったね。」

と、真理……。

「うん。でも、いなくなつて良かったんじゃないかな？」

それに、あんな獰猛な怪物がいたら皆が危険だろ。そう言う意味では、倒さなきゃいけない存在なんだよ。」

「そうだね。」

「そんじゃあ、蟹でも食べて帰るか。」

そう言つて、俺達は屈斜路湖を後にした。

## 第8話：クッシー（後書き）

実際にこんな獰猛な怪獣がいたら困りますね。  
所で、今回のお話はどうだったでしょう？



## 第9話：友達

東京都渋谷区・・・。

俺は一人、シブヤ隕石が落ちた所にいた。

辺りは瓦礫の海で何も無い。

実は、俺こと黒川 慎吾は、生まれも育ちも渋谷なのだ。

が、7年前に隕石が地球に飛来すると言う情報が入り、俺とお袋は渋谷を離れ、避難を余儀なくされたのだ。

親父は、

「此処に残る！」

との言つてんばりで、隕石に巻き込まれて他界。

俺は今でもそんな親父を憎んでいる・・・。

と、俺は過去を振り返っていた・・・。

俺が此処で一人佇んでいると、一人の男が俺の所にやって来た。

「君が黒川君だね？」

と、男は言う。

「そうだけど？」

俺は男にそう言った。

男は俺に、

「君、ワームだよね？」

と、聞く。

「そうだが？」

俺がそう答えると、

「君、僕たちの仲間に入らない？」

と、男が誘って来た。

「何の仲間？」

と、俺は聞く。

「人類ワーム化計画さ。今入れば君に世界の大半を明け渡してあげるよ。」

まあ、いやと言っても無理矢理入れるんだけどね。」

人類ワーム化計画・・・地球征服か。

「断る。」

「そう来ると思ったよ。」

男がそう言つと、数体のサナギワームがやって来て俺を取り囲んだ。  
「言つたでしょ？無理矢理でも入れると。」

お前もワームなら我々の仲間に入れ。」

男がそう言つと、俺を囲んでいたワームが一斉に飛び掛かつて捕まえ、俺を廃墟と化しているビルへと連れて行つた。

ビルの中は、瓦礫で足場が殆ど無く、上に上がる為の階段も崩れていた。勿論、エレベーターも壊れている。

「な！何なんだよ此処は！？」

俺がそう言つと、

「我々ワームのすみかで御座います。」

と、男が言つた。

「お、俺をこんな所に連れてきて、何をするつもりだ？」

「言つた筈ですよ。仲間になって貰うとね。」

あ、逃げ出そうなんて莫迦な事は考えない事です。」

「逃げ出そうとすとどうなる？」

俺は男に聞いてみた。

男は、

「連れ戻します。」

と、答えた。

仕方ない。此処は様子を見よう。

「で、あんたらは俺に何をしろと？」

「おや。我々の仲間になつてくれるのですか？」

と、男。

「俺は資格者である前にワームだ。お前達に手を貸してやる。」  
と、俺は言つた。

ふっ。此処でわざと仲間になつた振りをして潰してやる。

「それでは、貴方には我々ワームのチームリーダーになって貰います。」

「リーダー？俺が？」

「貴方は我々ワームが住んでいた星を治める偉大なる王。貴方がいなくては始まりません。」

と、男。

「王？」

「はい。」

「何故王？」

「お忘れですか？貴方の任務を？」

任務・・・何のことだ？

「貴方は地球より遙か離れた遠い星の王。」

貴方はそこで、我々の住んでいた惑星ビートルを治めていました。

しかし、7年前に惑星が壊滅の危機に見舞われ、惑星から脱出する事を余儀なくされました。

そして、我々ワームは、宇宙船で惑星と待機が似ているこの星に降り立ったのです。

だが、この星には既に生命が誕生していた。

そこで、我々ワームはその生命に成りすまし、この星を乗っ取ると言う計画を立てた。

当然、計画を立てた貴方なら覚えていらつしゃいますよね？」

俺がワームの王で地球征服計画を企てた。そんな馬鹿な話があるか。

が、事実俺はワームだ。コイツの言っている事は本当なのだろうか？

そう思った時、俺の脳裏に鮮明な映像が浮かんだ。

そこは7年前の渋谷だった。

「ビートル王。」

と、蠅をモチーフにしたワーム（レジストコード・フライワーム）

が、カブトムシをモチーフにした俺を呼んだ。  
レジストコード・ビートルワーム

「どうした？」

俺はそいつに聞く。

そいつは、

「この星に生命反応があります。」

と、答えた。

「生命反応？」

「ええ。」

「どんな奴らなのだ？」

「我々の様に力はないが、とても頭が良く、我々と同じ言葉を喋り、我々と同様に村や町を作って住んでいます。」

「ほお。それはとても良い環境だ。よし、この星を征服する。」

フライ（ワームの名前）、大至急部下を集める。作戦会議だ。」

俺はフライに命令をすると、

「了解！」

と、フライは言つて、部下に召集を掛けに行つた。

それから暫くして、フライが5体の部下を連れてきた。

「おい。これだけなのか？」

「申し訳ありません。」

他の者は、この星の連中に殺され、この5人しか残っておりません。

「

「フライ、どういう事だ？」

俺はフライに聞いた。

するとフライは、

「ZECTとか言う秘密組織が、次々に他の部下共を抹殺して行つてます。」

と、報告をした。

「宇宙人と対決か。面白い。」

奴らが何処まで着いて来れるか試してやろうじゃないか。」

と、俺は言つた。

「王。あれをやる気ですか？」

「ああ。先ず手始めに誰かを殺し、そいつに擬態する。」

それでも駄目なら最終手段として、身に付けて間もないアレを使う。

「と、俺はフライに言う。」

フライは、

「アレって、クロックアップですか？」

と、聞く。

「そうだ。」

「でも。奴らも身に付けているかもしれませんよ？」

「その時はその時だ。」

と、俺はフライに言った。

映像はそこで終わり、

「そう言えば、そんな事もあったっけな。」

と、俺は呟く。

「それから7年後の事、覚えていますか？」

男は俺に聞いた。

「覚えている。ZECTとか言う秘密組織が、マスクドライダーシステムとか言う武装システムを完成させたんだ。」

「その通りで御座います。」

と、男。

「そして、クロックアップを使って俺達に対抗した。その結果……  
っ!？」

俺が話を途中で止めると、

「どうしました!？」

と、男が聞く。

「俺……黒川 慎吾に擬態してから、マスクドライダーシステムを使って、繁殖をし続けてる部下共を次々に抹殺してる。」

そんな俺に、チームリーダーが務まるか？」

と、男に言った。

すると男は、

「大丈夫ですよ。ZECTを潰せば何もかも終わりますって。」

と、言った。

ZECTを潰す・・・か。そんな事したら、岬や加賀美、真理はどうなるんだろうか？

俺は悩んだ。

男はそんな俺に対し、

「王、何を悩んでいらっしやるんですか？」  
と、聞いた。

「ああ。ちよつと、擬態してから出来た友達の事を考えていてな。」  
と、俺は答える。

「駄目ですよ。敵に特別な感情を抱いちゃ。  
お父上が仰っておられませんでしたか？」

敵に女がいても恋をするな。恋をしたら負けだって。」  
「だったら俺はもう負けだ。俺が擬態した人間には好きな人がいるからな。」

と、男に言ったが、  
「でもそれって、擬態した人間の感情であって、自分の感情では無いですよね。」

と、男は突っ込む。

「それもそうか。  
所で、誰！？」

と、俺は男に聞く。

「あ、擬態してて気付きました？」  
そう言つて、男はワームに姿を変えた。

「フライ・・・。」

俺はそいつを見て呟いた。  
「覚えていてくれましたか。」

と、フライワーム。

「俺がお前を忘れる訳が無いだろ。」  
と、俺は言った。

「そうですね。私達、友達ですもんね。」

と、フライワーム。

先に言っておくが、コイツは雄<sup>オス</sup>ではなくて雌<sup>メス</sup>だ。

「フライ……。」

「何ですか？」

「俺とお前が友達になったのって……あの時だったよな。

ほら、お前……スタッグ（クワガタをモチーフにしたワームで、レジストコードはスタッグビートルワーム）に虐められてたろ。」

そうやって俺が昔話を始めると、カブトゼクターが俺の元へ飛んできた。

やれやれ……。

「ごめんな……フライ。」

俺はそう言っ、廃ビルを飛び出し、ゼクターと共に現場へ向かった。

現場に着くと、真理がワームに襲われていた。

ワームはクワガタをモチーフにしており、俺はそいつがスタッグであると直ぐに気付いた。

俺はそいつの前まで行き、

「虐めてんじゃねえよ。」

と、言っ。

スタッグは、

「生身で俺とやろっつてのか？」

と、聞く。

俺はスタッグに、

「昔と変わってないな。」

と、言っ。

すると真理が、

「慎吾、ワームに知り合い？」

と、聞いてくる。

が、スタッグは、

「人間に知り合いなどいない！」

と言って、俺をどかして真理に襲いかかった。

「待て。お前の相手は俺がやる。」

俺はスタッグに喧嘩を売った。

「何！人間のお前が？」

「ふっ、俺を人間だと思って甘く見てると痛い目を見るぞ。

最も、今の俺を相手にしたら、痛い目では済まされないがな。」

そう言っただけ俺は、カブトに変身をした。

「スタッグ・・・これが俺とお前の、最後の戦いだ。本気で来い。」

俺がスタッグにそう言っただけ、

「貴様、何故俺の名を知っている！？」

と、スタッグが驚いて言った。

「無駄口を叩いてる暇があったらさっさと来いや！」

俺はそう言っただけ、スタッグを思い切り殴りつけた。

「貴様・・・。」

スタッグはそう呟き、俺に反撃をする。

が、俺はそれを巧くかわした。

「そ、そのかわし方！？」

「どうした？」

「俺は知ってる。お前、ビートルだな。」

と、スタッグ。

「どうやら気付いた様だな。」

「貴様、何故人間の味方を！？」

それに、人間を殺して擬態し、この星を乗っ取るのがお前の役目だったろ。」

「変わったんだ。俺は生まれ変わったんだよ・・・人間にな。

どうだ、この際お前も心入れ替えて地球を守らないか？楽しいぜ、正義の味方って奴は。」

俺はスタッグにそう言った。

しかしスタッグは、

「嫌だね。」



と言つて、攻撃をして来た。

が、俺はまたもやそれを避けた。

「お前のは威力はあるが、スピードがいまいちだ。」

「おのれ！覚えてろよ！」

そう言つてスタッグは、クロックアップをして逃げて行つた。

「追わないの？」

真理はそう言つた。

「追わない・・・俺は、あいつが強くなつて帰つて来るのを待つて  
るんだ。だから、それまであいつは・・・。」

俺はそう言つて、変身を解くと、その場を去つて家路に着いた。

## 第9話：友達（後書き）

何なんだろう・・・この結末。

## 第10話：ガタツク誕生

東京都上野・・・。

此処で、一人の男が事件の被害者を調べていた。

男の名は、加賀美 新。

彼は、ワームに対抗すべく人類が結成した秘密組織「ZECT」の隊員である。

加賀美が遺体を調べていると、

「加賀美君。」

と、女性が声を掛けた。

女性の名は、岬 結月。

彼女もまた、彼と同様にZECTの隊員である。

そしてもう一人、この物語が進行する上で重要な人物が、高校生である主人公のこの俺、くわがた鋏形そういち総一様だ。

「あ、岬さん。」

と、加賀美。

「加賀美君、帰るわよ。」

「はい。」

二人は、遺体进行处理すると、家路に着いた。

翌朝、彼らは出勤をする。

「お前達、今日の仕事、分かってるな？」

と、田所が言う。

「廃工場に逃げ込んだワームの殲滅。」

と、岬が言った。

「その通りだ。じゃあ行くぞ。」

田所はそう言つて、墨田区八広の廃工場へと車を発車させた。

八広の廃工場に着くと、加賀美と岬はワーム殲滅の為に準備をする。

一方、主人公の俺様は、八広の廃工場に忍び込んで遊んでいた。

すると、最近世間を脅かしている、ワームとか言う奴と戦ってる二

人の人物を見かけた。

俺は暫くの間、そいつらの様子を見る事にした。

「しまった、もう弾が！」

加賀美は、弾を切らしてしまった。

「こっちもよ！」

岬も同様だった。

「俺、やってみます！」

「分かったわ。早く戻って来てちょうだい！」

「はい！」

加賀美は、そう返事をする、持ち場を離れて車に戻った。

「どうした加賀美！」

田所が聞く。

「ベルト、取りに来たんです。」

「そうか。ならその箱を開ける。」

田所は、加賀美の横にある箱を開ける様指示した。

加賀美はその箱を開けると、

「これがベルト・・・。」

と、呟いた。

「何をしている？さっさと行け！」

田所は加賀美にそう言った。

加賀美は、車を出ると、急いで持ち場に戻った。

加賀美が戻って来ると、岬はワームに捕まっていた。

「岬さん！？」

加賀美が叫ぶと、ワームはそれに気付き、岬を放した。

「良くも岬さんを！」

加賀美はそう言って、ベルトを腰に装着し、

「来い！ガタツクゼクター！」

と、右手を挙げながら叫んだ。

すると、クワガタの格好をした青い何かが空から飛んで来て、加賀美の前までやって来た。

加賀美は、それを掴もうとしたが、青いクワガタに避けられて掴み損ねてしまった。

加賀美を避けたクワガタは、方向を変えて俺の所へ飛んでくる。

俺はそれを掴み、

「選ばれし者は、俺だ！」

と、言つて、

「変身。」

と、言いながらそいつを腰のベルトに装着し、

「変身」

と言う機械音を鳴らしてクワガタがモチーフのマスクドライダーに変身をした。

変身が完了すると、

「change！」

と、機械音が鳴る。

俺の存在に気付いたワームは、脱皮をしてサナギワームから成虫ワームへと進化を遂げた。

成虫へと進化したワームは、肉眼では捕らえられない超高速移動能力・クロックアップをし、俺に近付いて来た。

俺は、キャストオフをすると、直ぐにクロックアップした。

クロックアップした俺は、迫ってくるワームにガタツクダブルカリバーで攻撃し、怯んだ隙にライダーキックをお見舞い。

ライダーキックを受けたワームはその場で爆発を起こして消滅した。成虫ワームを倒した俺は、クロックアップを解除して変身を解いた。それと同時に腰のベルトに装着されていた青いクワガタは、どこかへと飛び去って行った。

「何なんだお前？」

と、俺に聞く加賀美。

「選ばれし者だ。」

俺はそう言つて、去って行く。

「待つて！」

と、岬 結月。

だが、俺は岬が止めるのを無視し、その場から立ち去った。

## 第10話：ガタツク誕生（後書き）

じ、こねって・・・。

## 第11話：カフト&amp;カタック

ビストロ・ラ・サル。

俺こと黒川 慎吾は、此処でアルバイトをしている。

「黒川。良かったな、後輩が出来るぞ。」

と、ひよりが言う。

「後輩？新しいの入って来るのか？」

「ああ。と言うかもう来ている。」

と、ひより。

「もう来てる？」

俺が聞くと、ひよりは客席を指さした。

俺が見ると、客席を綺麗に拭いている男がいた。

「彼奴は・・・。」

「知ってるのか？」

「鍬形 総一。俺の中学の時の知り合いだ。」

俺はひよりにそう言った後、

「鍬形、久しぶりだな。」

と、鍬形に声を掛けた。

鍬形は俺の声に気付くと、

「お前、誰？」

と、言う。

「何だお前。この俺様を忘れたのか？」

「黒川か？」

「思い出したか。」

で、お前が新入りだったとはな。少々驚きだ。」

と、俺は言った。

「お前が先輩だったとはな。少々驚きだ。」

と、鍬形。

「どうでも良いが鍬形。俺はお前の先輩だ。敬意を払え。」



「ならお前も俺に敬意を払え。」

と、鍬形。

こ、コイツ……。

「鍬形、随分と傲岸不遜な態度を取る奴だなお前。」

「何を言ってるんだお前は？俺は世界一だ。」

と、鍬形。

「待て。世界一は俺だ。」

「いや、俺だ。」

「俺だ。」

「俺だ。」

「俺様だ。」

「俺様だ。」

「お前だ。」

「いや、世界一はお前だ。」

と、鍬形。

「ほお。認めたか。」

「いや、今のは言い間違いだ。」

と、そこへ、

「お前らしい加減にしろ。」

と、ひより。

「そうだぞ黒川。ほら、日下部先輩に謝れ。」

出た、ツンデレ症候群。

「鍬形。お前もだ。」

と、ひより。

「すみませんでした。」

そう言つて、鍬形は頭を下げた。

やってらんねー。

そう思つた俺は、

「帰る！」

と言つて、サルを出た。

とは言ったものの、行く宛なんて無いんだよな。

俺はそんな事を考えながら都内を歩き回っていた。

すると、一匹の成虫ワームが人を襲っているのを発見した。

「待て。お前の相手は俺だ。」

俺がワームにそう言っていると、ワームはいきなり俺を攻撃して吹っ飛ばした。

「威勢が良いじゃねえか。」

俺がそう言って、ゼクターを呼ぼうとした時、

「何だ。黒川か。」

と、鍬形がやって来た。

「鍬形……。」

「助けてやるから逃げろ。」

鍬形がそう言っていると、空から鍬形を目掛けてクワガタの格好をしたゼクターが飛んできた。

鍬形はそれを掴むと、

「変身。」

と言って、ゼクターを腰のベルトにセットしてマスクドライダーに変身をした。

「成る程。だが俺に助けはいらない。」

俺はそう言って、カプトゼクターを呼んで変身をした。

変身した俺は、カプトクナイガンでワームを瞬殺。

すると鍬形は、

「お前……カプトだったのか。」

と、言った。

「そう言うお前は何だ？」

「ガタツクだ。」

そう言っていると、鍬形は変身を解き、その場から去って言ってしまった。それを見送った俺は変身を解き、家路に着いた。これから面白くなりそうだ。

第11話：カフト & a m p・ガタツク（後書き）

鍬形君、慎吾と同じ性格ですね。

## 第12話：フライワームの野望

東京都渋谷区某所。

物語のヒロインである私ことフライは、此処で一人ぼんやりと立っていた。

「ビートル様・・・一体何処へ？」

と、私は呟く。

すると、一匹のサナギワームが気絶した人間の女の子を連れて来た。女の子は篠原 愛美にそっくりだった。

「ご苦労様。」

私はサナギワームにそう言った。

それから暫くすると、女の子が目を覚ました。

女の子は起きあがり、私の存在に気付くと、怯えながら後ずさりを始めた。

私は女の子に、

「逃げなくて良いのよ。」

と、言った。

女の子は、

「嫌・・・来ないで！」

と、怒鳴った。

私は怒鳴る女の子に、

「嫌だと言ったらどうする？」

と、聞いた。

すると、女の子は小型の機械を取り出した。地球人は携帯電話って呼んでたっけ。

「そんな物でどうするのかしら？」

私は女の子に聞いた。

「慎吾に。慎吾に電話を掛けるわ。」

「ふうん。慎吾ってのは、貴方のお友達かしら？」

でも残念ね。お友達が貴方の笑顔を見れないなんてね。

貴方はね、一度死んで私の中で生きて行くのよ。」

と、私は女の子に言った。

「そ、その前に慎吾が来て貴方を倒してくれるわ！慎吾は、慎吾はとっても強いんだから！」

と、女の子は言う。

「へえ。じゃあ、そうされる前に貴方の手でお友達を殺すと言うのはどうかしら。」

そう言つて、私は目の前の女の子に擬態した。

その瞬間、女の子の全てが私に流れ込んだ。

名前、霧島 真理。高校生。

真理には黒川 慎吾と言う好きな人がいる。

その人は世界一強く、世間を脅かしているワームと言う怪物にも負けた事が無い。

おまけに、怪物と戦っている時の彼は滅茶苦茶格好いい。

真理は、そんな彼が世界一大好きなのだ。

私は、その記憶に違和感を感じた……。

私は女の子に、

「貴方の大好きな慎吾って言う人……ワームに負けた事が無いってどういう事？」

と、質問を投げつけた……。

女の子は驚きながら、

「人の記憶。読みとれるくらいならその事も読みとつてみなさいよ。」

と言つて答えなかった。

良いわ。記憶の奥深くまで探つてあげるわ。

私は、真理の記憶の奥深くまで探つた。

すると、慎吾と言う男について刻まれた記憶を発見した。

成る程……慎吾はマスクドライダーカブトなのね。

え？マスクドライダーですって！？

ちよ、ちよつとそれって、ビートル様の事では！？

これはチャンスかも。

そう思った私は、

「貴方、慎吾と仲が良いみたいね。」

と、女の子に聞いた。

すると女の子は、

「ワームの分際で気安く慎吾を呼び捨てしないでちょうだい！」

と、言った。

む、ム力付く！

「貴方ね、人間の分際でビートル様と仲良くしてんじゃないわよ！  
こうなったら、彼に近づくため、貴方を殺すしか無いみたいね。」

そう言つて、私はワームに姿を変えると、真理の首を掴んで持ち上げた。

「ぐ、ぐる、じい。おろ、じで。」

と、真理。

「誰が降ろすもんですか！」

あ、な、だ、な、んの、も、ぐ、でぎがあ、っで？」

「目的？貴方の大好きな慎吾に近づく為。そして、慎吾を私だけの物にする為。」

人間の貴方には勿体ない。だから、貴方を此处で殺し、私が貴方になるわ。」

そう言つて、私は真理の首の骨を砕いてトドメを刺した。

すると、真理は気を失ったかの様にぐったりして動かなくなった。

私は真理が死んだのを確認すると、真理の首を放して下に落とし、真理に擬態をした。

「これで、これで良かったのよ……。」

真理に擬態した私はそう呟いた。

ビートル様、待って下さいね。

このフライ……いや、真理が貴方を必ず私の物にしますから。

## 第12話：フライワームの野望（後書き）

愛する者の為に人を殺す・・・。

これが人間だったらあるまじき行為ですな。

それにしても、女の子って何をするか解らないから怖いですね。  
でも、作者はそんな子が好きだったりするんですね。（え？

### 第13話：カブトVSフライワーム

俺こと黒川 慎吾は今、自分の部屋にいる。

俺はそこで、今月号の格闘雑誌を読んでいた。

すると、俺の携帯がメールを着信した。

俺は、携帯を取るとメールを確認。

メールは、真理からだった。

何々……。

「助けて。渋谷に……。」

ほお。真理の奴、渋谷に……。

つて、渋谷！？

あそこは7年前から封鎖されている。それなのにどうして！？

と、兎に角、渋谷に行ってみよう。

きつと、真理に何かあったんだ！

俺は急いで支度をし、自宅を出るとカブトエクステンダーにまたがつて渋谷を目指した。

途中、ワームが人を襲っていたが、相手なんかしてる暇は無い。

急がないと真理が危険なのだ。

俺が焦ってスピードを出していると、後ろからパトカーがサイレンを鳴らして追いかけて来た。

「そのバイク止まりなさい。」

と、パトカーのスピーカーから聞こえる。  
嫌なこった。

俺はカブトゼクターを呼び、カブトに変身すると、瞬時にキャストオフをした。

「残念だが、此処でお別れだ。」

そう呟き、俺はクロックアップをした。

すると、カブトエクステンダーがクロックアップに同調し、猛スピードで町中を駆け抜ける。



そして、ようやく渋谷に到着した。

俺はエクステンダーを止めると、エクステンダーを降りて変身を解き、封鎖されている渋谷へと入って行く。

渋谷は、瓦礫以外何も無かった。それも、7年前に墜落した宇宙船のおかげだ。

「本当にこんな所に？」

と、俺は独り言を言う。

俺は、暫くの間歩き続けた。

が、こう瓦礫だらけじゃ何が何だか分からない。

それでも俺は真理を捜し続けた。

それから暫くすると、何やら怒鳴り声が近くから聞こえた。

俺は、それを確かめるべく、所々残っている壁を盾に、その怒鳴り声がする所を確認した。

するとそこには、一匹のワームが女の子の首を掴んで持ち上げている。俺はその女の子が真理である事に気付いた。

「真理……。」

俺がそう呟くと、真理はぐったりした。

どうしたのだろうか？

俺は、ワームに気付かれない様に近づいて真理の安否を確認した。

真理は死んでいた……。

俺がワームに顔を向けると、ワームは真理に擬態する。

「これで、これで良かったのよ……。」

と、真理に擬態したワーム。

「良くねえな。」

と、俺はワームに向かって言う。

真理に擬態したワームは俺の声に反応して振り向き、

「あ、慎吾じゃない。」

と、言った。

「ワーム如きが気安く俺を呼ぶんじゃないよ。」

「な、何言ってるの慎吾？ワームって何？」

「惚とほけてんじゃねえよ。」

そう言っつて、俺は倒れてる真理を指さした。

「俺は見てた。お前が真理の首の骨を砕いてトドメを刺した所を。」  
俺がそう言っつと、擬態したワームは元の姿に戻った。

その姿は、フライワームだった。

「ふ、フライ……。お前だったのか。」

「問題でもありますか？」

こ、コイツ……。自覚無いな。

「大有りだ。お前は俺の大事な友を殺した。その何処が問題じゃないって言っんだ。」

「あ、あれはビートル様の為を思っつて。」

「俺の為？いや、違っつな。」

「何が違っつんですか？」

私は、7年前にビートル様が命令した通りに人を殺して擬態しただけですよ。」

この時、俺の堪忍袋の緒が切れた。

「許さねえ。絶対に許さねえ。」

「び、ビートル様？何をそんなに怒っつていらっしやるんですか？」

「俺が怒っつてんじゃねえ。俺の中の慎吾が怒っつてんだ！」

俺がフライに言っつと、カブトゼクターが俺の元へとやっつて来た。

「な、何をなさるおつもりですか！？」

「お前を……。殺すんだよ！」

そう言っつて、俺はゼクターを掴んだ。

「変身！」

そう言っつて、俺はゼクターをベルトにセットし、

「HENN SHINN！（変身！）」

の機械音と共にカブト・マスクドフォームに変身をした。

「どうしてもやると言っつのですか……。それなら私も容赦しませ  
ん。」

そう言っと、フライワームはクロックアップをした。

「俺から逃げられると思うなよ。」

俺はそう言っと、ゼクターホーンを起こし、エネルギーをチャージさせ、

「キャストオフ。」

と言っと、ゼクターホーンを完全に倒す。

すると、

「cast off。」

の機械音と共にアーマーが弾け飛び、ライダーフォームへの移行が完了すると、

「change beetle。」

と言っ機械音が鳴った。

「クロックアップ。」

俺はそう言っと、

「clock up。」

の機械音を発してクロックアップをした。

クロックアップした俺は、フライワームに近づいて、

「こいつは・・・真理の分だ！」

と言っと、思い切り殴りつける。

だが、フライワームは素早くそれを手で受け止めた。

「ビートル様。早さでは私の方が上ですよ。」

マラソン大会で私に勝った事がありますか？」

「ならこれでどうだ？」

と、俺はカブトクナイガン・アックスモードをパンチを止めているフライワームの腕に振り下ろした。

フライワームはそれに気付くと、素早く手を引っ込めた。

「危ないわね！」

そう言っと、フライワームはもの凄いスピードでラッシュをして来た。

「くっ！」

俺は連続パンチを全て受け、フライワームの攻撃がやむと足下がすくみ、その隙にフライワームが真理のスペシャル回し蹴りを放った。これは!?

と思った俺は、

「プットオン。」

と言って、ゼクターホーンをマスクドフォームの位置に倒した。すると、

「put on.(プットオン)。」

と機械音を鳴らし、装甲を張って完全に防御。

だが、フライワームはそれに気付かず回し蹴りを叩き込んだが、装甲のお陰で俺は殆どダメージを受けずに済んだ。

「ふっ、真理のスペシャル回し蹴りをやるとは大したもんだ。

だが、お前の負けだ。よく見てみる。」

俺が言うと、フライワームは俺の容姿を見て驚いた。

「そんなの・・・卑怯よ。」

「これが戦いつてもんだろぅが。」

俺はそう言って、再びキャストオフし、

「ワン、ツー、スリー」

と、フルスロットルを順番に押して行き、ゼクターホーンを倒してチャージさせた。

「ライダー、キック。」

俺はそう言って、ゼクターホーンを再度倒してライダーキックを発動させ、

「ルライダーキック」

の機械音と共に回し蹴りを放った。

ライダーキックを受けたフライワームは、大ダメージを受けてその場に倒れた。

かろうじて意識のあるフライワームは、

「な、何故手加減をなさったのですか？」

と、聞いた。

俺はそれに対し、

「出来ない……。お前を殺したら、真理の記憶が消える……。」「  
と言った。

そう、あの時……。フライワームが回し蹴りをして来た時、俺は真理を感じたのだ。

だから手加減をしてやったのだ。

フライワームは、真理の姿になると、ゆっくり起き上がり、

「慎吾……。」「

と、俺を呼ぶ。

「何だ？」「

「慎吾……。私、平気だよ。ワームになっても……。」「

私、ワームの中で生きて行く……。だから、もうやめて。」「

それを聞いた俺は変身を解き、真理に擬態したフライワームを抱いた。

にしても、不思議な事だ。

人間の心って……。ワームまでもを操ってしまう……。」「

俺も慎吾の心に操られているのだろうか。

### 第13話：カブトVSフライワーム（後書き）

フライワームにトドメを刺さなかったカブト。

それは自分もワームだったから？

それとも、真理に対する情って奴？

てか、次のネタが浮かばない。

わいはどないすればええねん！？

## 第14話：現る

グサッ！

ワームに変態した俺の腕が真理の背中に突き刺さった。

「ど・・・どう・・・し・・・て？」

そう言うのと、真理はフライワームに変態した。

俺は慎吾の幻体を出してこう言った。

「俺は、ワームを許さない。ワームは俺が全て倒す。」

俺は腕を抜き、慎吾に擬態する。

「今のは真理の分・・・。」

そう言うのと、カブトゼクターが飛来し、バックルへと装着される。

「変身。」

俺はそう呟いた。

「HENSHIN！」

電子音が鳴り、装甲が身を包んでカブトに変身した。

「キャストオフ。」

ゼクターホーンを180°展開。

「cast off」

電子音が鳴ってアーマーが吹っ飛び、フライワームを目掛けてもの凄いスピードで飛んでいく。

ダダダダダ、と連射音を立て、フライワームに全てのアーマーがヒットした。

カブトホーンが起きあがり、

「change beetle」

と、電子音を鳴らしてライダーフォームへの移行が完了した。

「clock up」

サイドバックルを押し、クロックアップを発動した。

「one-two-three」

と、フルスロットルを順番に押し、ゼクターホーンを展開してパワ

ーをチャージ。

「ライダー、キック。」

と、ゼクターホーンを再び展開。

「rider kick」

の電子音と共にフライワームに回し蹴りを叩き込んだ。

「clock over」

ドーン！

クロックオーバー直後、爆発が起こり、煙が発生して視界が遮られる。

やがて、煙が晴れて視界が良くなってくる。

が、その中に黒い人影が一体、真っ直ぐ立っていた。

そして、完全に煙が晴れると、それがフライワームの姿である事が直ぐに解った。

「そ、そんな馬鹿な！？」

俺は驚きと共に焦りが生じた。

フライワームは真理の幻体を出し、

「残念でしたあ。」

と、バカにする様に笑いながら言った。

「うおおおおお！」

俺は叫び声をあげながらフライワームに猛攻撃を仕掛けに行った。

シュシュシュシュン！

パンチによって弱風と風音が起きるが、肝心のパンチが一発も当たらない。

「そんなんじゃないや当たりませんよあ。」

真理の幻体は、再びバカにする様な口調で言った。

「ざけんな！」

俺はリアットをするが、目にも留まらぬ速さで避けられ、背後を取られてしまった。

「お前の力では私を倒す事など出来ない。」

幻体が言うと、フライワームは背中に正拳付きを入れた。



ドカーン！

轟音と共に、強烈な痛みが背中に走る。

「ぐうわ！」

「トドメよ！」

幻体が言うつと、フライワームは空高く飛び上がり、俺を目掛けて急降下をした。

ヒューン！

飛行機が空を飛ぶのと同じ音がした、と思うと、もの凄い衝撃が上から掛かった。

ズドーン！

地面に大きなクレーターが出来、俺はその真ん中で空を見上げる様に倒れていた。

ブーン、とゼクターが外れて飛んでいき、俺の身を包むアーマーが粒子に変換され、バツクルへと吸い込まれていった。

ズシ、ズシ、ズシ、ズシ

フライワームが足を引きずらせながら歩いて来た。

俺の前に黒い人影が現れる。次第に、目が慣れると、それがフライワームだと言うのがハッキリ見えた。

「俺の負けだ。やれ・・・。」

俺が言うつと、フライワームはトドメを刺そうと構えた。

「Hyper clock up」

どこからか電子音が聞こえ、同時にフライワームが消滅した。

「Hyper clock over」

再び電子音が聞こえた。

コーン、コーン、コーン、コーン

何者かの足音が聞こえ、それが段々と近付いてきた。

そして、ついにそれが俺の前に立った。

ふと気付くと、そいつの姿はもう無かった。

一体、何者なのだろうか？

## 第14話：現る（後書き）

か、カブト・ハイパーフォームの登場か！？

## 第15話：兄弟

あるトンネルの中。

「ライダーキック。」

「カシャ！」

カブトは、ゼクターホーンを展開。

「R i d e r   k i c k」

カブトは、電子音と共に、迫り来るワームに、回し蹴りを放った。

「ズドーン！」

ワームは緑の血を吹き出し、爆発を起こして霧散した。

「ブーン」

ゼクターが飛んで行き、変身が解ける。

「なあ、天道。」

加賀美が、変身を解いた天道に、声を掛けた。

天道は黙って振り向く。

「お前って、ワームを倒す時、躊躇ったりしないのか？例えワームとは言え、擬態した人の記憶を引き継いでいるんだぞ？」

「それがどうした？」

躊躇えばこっちがやられる。

相手がワームなら、俺は非情に徹する。」

天道は言い切ると、その場を離れた。

「（何だよ、あいつだって、ワームじゃん。）」

加賀美は、天道を見送りながら、そう思った。

その頃、ビストロ・ラ・サルでは、一人の男子高校生が、ひよりと仲良く話をしていた。

「カランカランカラン」

扉が開き、天道が入ってきた。

「ひより、何時ものだ。」

そう言って、天道はひよりに、鯖の味噌煮を要求。

「たまには手伝え。」

ひよりは、そう言いつつ、天道と調理場へ入って行った。

「（何だ、あいつ？」

ひよりと仲良くしゃがって。）」

それを見ていた、男子高校生が思った。

気が落ち着かない男子高校生は、ビストロ・ラ・サルを出ていった。

「そのくらいの腕があるんだ。」

そろそろ、メニューに出してみたらどうだ？」

天道はひよりに聞く。

「弓子さんにも同じ事を言われた。」

ひよりは笑顔で言った。

「ボク、やってみる。」

「よし、ひよりシェフの誕生を祝ってパーティをしよう。

仕事が終わったら家に来い。」

天道はそう言い残すと、ビストロ・ラ・サルを出ていった。

その頃、先ほどの男子高校生が、ワームに遭遇していた。

「邪魔だ、俺の視界から消えろ。」

男子高校生は、ワームに言った。

が、聞き入れては貰えず、問答無用で襲い掛かってきた。

が、カプトゼクターが飛来し、男子高校生を攻撃から守った。

男子高校生は、ゼクターを掴み、バックルにセットした。

「変身！」

男子高校生は叫ぶ。

「ヘンシン！」

電子音が鳴り、男子高校生はカプト・マスクドフォームに変身した。

「ズドーン！」

突然、ワームが爆発を起こした。

カプトは、突然の出来事に驚いた。

いや、驚くのはまだ早い。

何と、煙の中から、別のワームが姿を現したのだ。

そのワームは、カブト・ライダーフォームと瓜二つだった。  
差し詰め、カスクワーム、と言った所か。

「（ワームが、ワームを！？）」

カブトは更に驚いた。

カスクワームは、振り向くと、そのまま去ろうとした。

が、落ち着きを取り戻したカブトが、カスクワームに襲い掛かった。

「（んっ！？）」

カスクワームは、それに気付くと、直ぐに避けて反撃に出た。

「何のつもりだ？」

カスクワームの横に、天道の幻体が現れて言った。

「ほお、そう言う事か。」

そう呟いたカブトは、キャストオフをし、カブト・ライダーフォームに移行した。

そして、カスクワームに接近し、連続パンチをくりだした。

カスクワームは怯み、後ろに下がって行く。

「ひよりに近付いたら、俺が許さない！」

カブトは、そう言いながら、カスクワームを追い込んで行く。

「貴様、ひよりの何だ！？」

カスクワームは聞く。

「お前が知る事では無い！」

そう言つて、カブトはフルスロットルに手を掛けた。

「one-two-three」

「カシャ！」

カブトホーンを展開するカブト。

「これでおしまいだ！」

ライダーキック！」

「カシャ！」

「Rider kick」

カブトは、カスクワームに回し蹴りを放った。

「ズドン！」

カスクワームは爆発を起こし、木っ端微塵になった。そう思われたが、煙の中に黒い影が立っているのが見える。

カブトはそれを見つめる。

やがて、煙が晴れると、無傷のカスクワームが姿を現した。

「そんな、馬鹿な!？」

カブトは驚いた。

カスクワームはその隙に、カブトを攻撃して立場を逆転させる。

「やっぱりお婆ちゃんの言った通りだ。

俺が望みさえすれば、運命は絶えず俺に味方する!」

カスクワームはそう言って、怯んだカブトにトドメを刺した。

カブトの腹に、カスクワームの鉄拳が見事に決まった。

「ぐっ!？」

カブトは力が抜け、腹を下にして倒れた。

「ブーン」

カブトゼクターが飛び去り、変身が解けた。

カブトをのしたカスクワームは、天道に擬態する。

「死ぬほど痛いかな？」

天道は聞いた。

「クソッ!」

男子高校生は、叫ぶと立ち上がった。

「ほう、まだ立てるのか？」

「俺は、お前を倒すまで、死なない!」

「ブーン」

再びカブトゼクターが飛来。

男子高校生はそれを掴もうと、手を伸ばした。

が、カブトゼクターは避け、天道へと向かって行く。

天道は飛来したゼクターを掴む。

「ふざけるなあ!」

男子高校生は、カブトムシをモチーフにしたワームに変態した。差し詰め、ビートルワーム、ってところか。

「貴様！？」

天道は驚いた。

そんな天道に、ビートルワームは容赦無く襲い掛かる。

天道はヒョイツと避けた。

「相変わらずだな、ビートルワーム。」

天道が口を開いた。

「貴様、俺を知っているのか？」

男子高校生の幻体が現れて言った。

「何を言っているんだ？俺とお前は、血を分けた兄弟だろう。」

天道の言葉に、ビートルワームは驚いた。

## 第15話：兄弟（後書き）

スランプに陥りました。

勝手で申し訳ありませんが、打ち切りにします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7280a/>

---

仮面ライダーカブト TIME PARADOX

2010年10月10日03時50分発行